

むろと元気塾

1. 事業の概要

○ 事業の趣旨

自然体験活動をととして、児童のコミュニケーション能力を高めるとともに自己肯定感の向上を図る。

○ 実施期間

令和元年10月 5日(土)～ 6日(日) 1泊2日

○ 対象者・参加者数(人数/定員)

安芸和光寮を利用している親子 16名/30名

○ 活動プログラム

	10月5日(土)		10月6日(日)
10:30	安芸和光寮発	6:00	起床
11:30	海浜活動センター着	7:15	朝のつどい
11:45	昼食	7:30	朝食
12:30	海の活動準備	9:00	自由時間(おもしろ自転車)
13:00	海浜活動センター発	10:30	野外炊事(ピザ作り)
13:15	とろむ着	13:00	おわりのつどい
	SUP体験	13:30	自然の家発
	※小学生未満はトレーナー体験	14:30	安芸和光寮着
14:30	とろむ発		
14:45	海浜活動センター着・片付け		
15:30	海浜活動センター発		
16:00	自然の家着		
17:30	夕べのつどい		
17:45	夕食		
19:00	レクリエーション ～20:00まで (保護者は子育て相談に参加)		
20:00	入浴		
22:00	就寝		

2. 活動の様子

<1日目>

昨年度に引き続き、安芸和光寮の親子を対象として、むろと元気塾を行った。今年度は、安芸和光寮の職員を含めた16名が本事業に参加した。まず1日目は、とろむでSUPの活動を行った。初めてのSUP体験であったが、どの参加者も楽しそうに活動することができていた。

また、小学生未満の参加者についてはドルフィンセンターでイルカと触れ合う活動を行った。初めて見るイルカに少し怖がりながらも、イルカのジャンプを見たり、ドルフィンタッチを体験したりする活動を通して、徐々にイルカに慣れることができた。

夜間の活動では、安岡雄三先生を招いての相談会や子供を対象としたレクリエーション活動を行った。相談会では、安岡先生の経験談を中心に、子育てをする中で困っていることや子供への関わり方について話を聞くことができた。また、レクリエーション活動では、流木クラフトを作ったり、ボランティアリーダーを中心としたゲームをしたりして楽しむことができた。

夜、ベッドメイキングをする際には、職員やボランティアが積極的に声掛けを行い、参加者自身で準備ができるように支援した。

<2日目>

2日目は、午前中にミニサイクリング場でおもしろ自転車の活動を行った。1人乗りの自転車に乗ってコースを回ったり、友達と一緒に自転車に乗り、協力してペダルを漕いだりする姿が見られた。初めて自転車に乗る子供もいたが、保護者の方と一緒に乗ることで、安全に活動することができていた。

活動後は、野外炊事棟へ移動し、ピザ作りを行った。みんなで協力して生地を作ったり、野菜を切ったりして準備を行った。その後、できた生地をかまどに入れて10分程焼くことで、1人1枚ずつピザを作ることができた。ピザ作りを通して、友達とコミュニケーションを取りながら、協力して料理を作ることの楽しさを学ぶことができた。

3. 事業の成果と課題

○ 参加者の感想

- ・初めてのSUPがとても楽しかったです。子供達にとって、よい経験となりました。
- ・ピザ作り体験では、ちょうどよい焼き加減で、おいしいピザを作ることができました。
- ・ボランティアの方とたくさん遊ぶことができ、子供達も喜んでいました。ありがとうございました。
- ・夜間の相談会では、日頃悩んでいることについて相談することができ、とても有意義な時間となりました。

○ 事業の成果

- ・野外炊事や海の活動を体験する中で、参加者同士でコミュニケーションを取り、意欲的に関わることができていた。
- ・活動前はSUPに乗ることを怖がる参加者もいたが、仲間と協力して活動する中で、SUPの楽しさを感じるようになっていた。
- ・保護者相談会では、家庭での生活の問題点について話し合うことで、子供との関わり方を見直すよい機会となった。
- ・保護者の方からは、来年もぜひ同じような活動をしたいのとの反応があった。普段とは異なる自然の中での活動を通して、保護者同士で過ごす時間を楽しむことができていた。
- ・職員やボランティアが参加者に対して、挨拶や早寝早起き、食生活の重要性を伝えることで、基

本的な生活習慣を身に付けさせるようにした。

○ 事業の課題

- ・今回、安芸和光寮の希望によりSUPの活動と小学生未満の子供を対象としたイルカのふれあい体験を取り入れた。どちらの活動も楽しむことができたが、参加者からは、両方とも活動を行いたかったとの意見も出たため、今後は参加者全員が同じ活動をできるように配慮する必要があると感じた。
- ・活動中、決まった子供同士、保護者同士の関わりが多く見られたため、全員で協力して行うことができる活動を多く取り入れる必要があると感じた。